

横浜ユーラシア文化館開館 20 周年記念シンポジウム 「東アジアの帯金具と古代の日本」講演録

2023年11月25日（土）に、横浜ユーラシア文化館開館20周年記念事業として、シンポジウム「東アジアの帯金具と古代の日本」（主催：横浜ユーラシア文化館）を情文ホールで開催した。ここにその講演録ならびに討議の記録を収録する。講師ならびに発言者の了解をえて、本紀要編集担当者が編集した。講演で言及された史資料・図のうち主要なものについては、原則として各講演録の末尾にまとめて掲載した。

講演 1

大津市穴太遺跡と金銅製花文帯金具

講師 岡田 有矢*

はじめに

私の今日のお話としては、穴太遺跡がどういう所にあるのかというお話と、帯金具がこういう状況で出たというお話、今発掘調査の報告書を作成している途中ですので⁽¹⁾、そこで得た知見ですとか、調査成果はこうでしたという報告書のまとめのようなお話をさせていただければと思います。このあとご講演されます小嶋先生の科研の事業の中で、この帯金具の三次元計測をさせていただきましたので、その画像を皆さんの前で少しお見せすることができればと考えております。

1 穴太遺跡の立地

まず、滋賀県大津市の簡単なお説明からさせていただきます。大津市というのは、琵琶湖の北西部から、ぐるっと回った南の部分までになります。そして、大津市の中で、唯一琵琶湖から外に流れる部分が瀬田川。滋賀県は瀬田川以外は、基本的に全部山側から琵琶湖の方に流れる川しかありません。

大津市の有名な遺跡や史跡を簡単にご紹介させていただきますと、比叡山延暦寺。私は元々九州にいたもので、関西のことをあまり詳しく知らなかったんですが、延暦寺は実は大津市にあります。よく勘違いされますが、京都市では決してありません。大津市に世界遺産が一つだけあるというのは延暦寺のことです。それと、延暦寺から分かれた寺門派とい

われる三井寺園城寺。また、これは真言宗になりますが、石山寺といまして、源平合戦で頼朝がここを保護したとか、来年の大河ドラマの主人公、紫式部が源氏物語を書き始めたとか着想を得たとされているのがこの石山寺です。その他には、壬申の乱や源平合戦にも関わる戦の舞台となった瀬田の唐橋。それと、奈良時代・平安時代の話になりますが、いわゆる近江国府と国庁といわれる当時の県庁のような役割の所、そのやや西隣には瀬田の駅家といまして、官道の馬を乗り継ぐ場所ですね、東海道・東山道の駅家ということになります。

そんな中、今回お話をさせていただく穴太遺跡というのがどこにあるかと言いますと、大津市の中でも西側の部分、湖西といわれる地域になります。比叡山のお膝元のような場所に、穴太遺跡は存在しています。特にこの湖西地域というのはすごく平地が少ないんですね。山と湖に囲まれた部分にしか平地がありませんので、穴太遺跡はそういった斜面状の所に作られた集落遺跡だにご理解いただければと思います。

図1で、線が引いてありまして、その中で囲んである部分が穴太遺跡の範囲になります。その中で今回調査した部分は、やや中央から南に行った部分の、西端の部分で発掘調査をしています。かなり山が近づいている所です。

2 穴太遺跡令和4年度発掘調査の概要

続きまして、実際に掘った部分に関しての簡単なお説明をさせていただきます。私が掘った部分というのは、大津市弥生町という地名の所になります。

(1) 大津市『穴太遺跡（北山田地区）発掘調査報告書』大津市埋蔵文化財報告（174）、2024年刊行予定

*OKADA Yuya 大津市文化財保護課技師

実際に調査をしていた期間は、昨年の5月から6月の、1ヶ月から1ヶ月半の期間でした。調査面積はたったの150平米と、おそらくこの会場よりも圧倒的に狭いくらいの範囲しか調査をしていません。いわゆる緊急発掘調査という工事にともなう調査で遺構を発見しています。その調査の時の地図ですが、発掘調査をした部分というのが、こちらになります(図2)。これは今回工事をしますと言われた範囲ですが、その中で、実際に工事で遺跡がこわれてしまう部分だけ発掘調査をいたしました。周辺にはいっぱい発掘調査の事例があるんですけども、宅地造成にともなう道路部分しか、天津市は実はほとんど発掘調査をしていません。なぜかと言いますと、遺跡が壊れない部分—盛土造成をするとか、造成の切土もかなり浅いとかいう部分には、無理に発掘調査をしたりすることはないですので、実際に周りはいっぱい発掘調査をしています。本当に狭い範囲でしか調査をしていませんので、結構わかっていないことも多かったです。たとえば、あとでお話をする、今回出土している流路といわれている遺構も、その続きとなる遺構は実はまだ見つかっていません。

ではこの周りではどんなものが見つかっているかと言いますと、平安時代でも終わりの方、11世紀から12世紀の礎石建物と言われているものが2箇所出てくるくらいで、残りは概ね古墳時代、6世紀後半ぐらいの集落が確認されています。

今回の調査で確認された遺構は、古墳時代の大壁状建物という、渡来系かと言われている建物も見つかっていますが、一番メインになるのは、平安時代の流路跡です。図3が今回の発掘調査の遺構平面図になります。図では色分けをしていますが、概ね2時期あるということがわかりました。方位は上が北になっています。右が東です。×印で線を引いている所、ここが、今回シンポジウムのテーマにもなっている帯金具の出た場所です。つまり、この流路の中から帯金具が出たということです。

3 平安時代の流路

簡単に流路の説明に移ります。この流路というのはほぼ南北方向に走っています。ほぼ正方位をとって走っているのではないかと思います。幅は3mほど、深さは10cmから20cmとかなり浅い状況でした。このあとお話をしますが、掘り返しの痕跡が確認できて、遺物としては灰釉陶器、緑釉陶器、土師器、木簡と漆器、それに加えて、今回会場に展示をしています。出土遺物全体を見通すと、概ね9世紀から、最終的な埋没は11世紀ぐらいと考えられますが、時期の話はまた後で詳しく話します。調査区の間を流れる壁といわれるものが、どんどん南側に行くほど深くなっていますので、今回の調査区の間を流れる流路というのは、北から南の方に流れている地形だということがわかります。基本的には琵琶湖に向かって落ちてゆく地形の筈ですので、湖西地域だと西から東に流路が流れてゆくのが普通なんです。今回はそれにちょっと逆らった方向で、北から南に流れている流路というのが見つかったということです。

その流路の土層断面を見ると、左側の部分と右側の部分で若干色が違います。掘り返しの痕跡というものが見えてきて、左側の黒い土の部分と右側の灰色の土の部分とで、時期が2つあるんじゃないかということを考えています。まず、左側の流路が全部埋まったあとに、一度掘り返しがされて、新しい右側の流路が作られ、またそれが埋まったというように考えています。新しい流路の上部から「て」の字状の土師器皿といわれるものが出ています。京都近辺でよく見られる土師器皿ですが、断面が平仮名の「て」の形をしているように見えるので、「て」の字状という言葉方をしています。ではそれらの年代がいつ頃かという話になるのですが、「て」の字状の製品というのは、京都市埋蔵文化財研究所が出している土師器の編年⁽²⁾というのがあります。それにあてはめると、京都の土師器編年でいう3C期、実年代でいうと990年から1020年頃になります。

(2) 平尾政幸「土師器再考附勉強会資料集」『洛史』第12号、京都市埋蔵文化財研究所、2019年、pp.9-150

これが今回の流路の一番上にポンと乗っていたということになるので、新しい時期の流路の埋まった時期というのは、990年から1020年頃になるだろうということです。

それ以外のほか多くの部分から出ている灰釉陶器・緑釉陶器からみている時代というのは、おおむね京都の編年で2B期といわれる時期、実年代で言いますと870年から900年頃に当てはまるのではないかというのが、今の我々の見解です。なので、真っ黒い土の流路というのはこの870年頃から埋まり始めて、どこかの時期で一度掘り返しがあったあと、灰色の土の別の流路が990年から1020年頃に完全に埋まったということになるんじゃないかと。この掘り返した時期というのは明確にわからないんですが、そういったことが言えるんじゃないかと考えております。図3でいいますと、左側＝西側の薄い色の部分が元々の古い流路になりまして、右側＝東側の濃い色の部分は後から掘り直しているんじゃないかと。そしてそれらの時期を大まかに見ると、薄い色の部分が9世紀から10世紀、濃い色の部分が10世紀から11世紀というイメージになるのではなかろうかと考えています。

そして、帯金具がどこから出たかといえますと、図3の×で示したあたりで見つかっていますので、帯金具の埋没時期は9世紀から10世紀の可能性が高いのかなあと、今のところは考えています。

ではその流路というのは何なのかということですが、流路からは呪符木簡といわれる、おまじないの書かれた木簡というのが出ています(図4)。「急急如律令」と書かれておりまして、いわゆる陰陽師などが使うおまじないの言葉のものだということです。そのほか、白い棒状のものの上が真っ黒くなっているW1からW9という出土品がありますが、これは木製品の中のいわゆる燃えさしというもので、松明のかけらです。松明がこの流路の中に一緒に入っていましたので、そんなものを使ったおまじない事ですとか、祭祀行為的なものを、もしかした

らこの流路ではやっているのではなかろうかと考えております。

年代の根拠となるような土器ですが、少し古墳時代の土器も混じってはいますが、大きく見ると灰釉陶器、緑釉陶器、土師器、残りが須恵器というようなものが出ています。私が熊本で発掘調査をしている時に、こういった緑釉陶器とか灰釉陶器とかいったものをほとんど見たことがありませんでした。おそらく京都や関西地方、あるいは東海地方から離れていくと、こういった緑釉陶器や灰釉陶器は見られなくなっていくんじゃないかと思いますが、たとえば熊本ですと、こういった緑釉陶器や灰釉陶器が出ると、有力者層といった言われ方がよくされます。ですが穴太遺跡などのある滋賀県大津市の湖西地域に関しては、むしろ土師器とか須恵器は多くなくて、こういったお茶碗とかお皿みたいな形態は、灰釉陶器や緑釉陶器の比率が他の地域に比べてすごく高いと言われております。当たり前のように灰釉陶器や緑釉陶器が日常的に使われている地域ですので、灰釉陶器や緑釉陶器が出たからすごい遺跡だということは一概に言えないのかなと考えております。

4 金銅製花文帯金具

ではここで、帯金具の話をさせていただきたいと思います(図5)。帯金具自体は、縦2.7cm、横3.2cm、ちょっと細かいところで言うと、テンいくつ、っていうのがあるんですけども、概ねこんなところの大きさになっております。素材に関しては、京都国立博物館のご協力のもと、蛍光X線の科学分析をさせていただきました。その分析結果からいいますと、今回は表金具と、それとつなぐ裏金具も一緒に出土していますが、表裏ともに青銅製で、それに鍍金をしているのではないかという痕跡が見受けられました。そして表金具の表面には忍冬唐草文が、その文様の隙間には魚々子(ななこ)が施されています。忍冬文と唐草の文様の隙間などに埋められている、丸いプツプツとしたものが魚々子です。この金

銅製の花文帯金具の出土は全国で3例めということです。

今回は蛍光X線分析の他に、これも京都国立博物館のご協力のもとCTも撮っておりまして、この表金具から飛び出る鉾の形態が、右と左で少し違うということも判明しました。こちらは補修という言葉方をしますが、本当に補修かどうかということは今後検討の余地があります。鉾は帯=ベルトにとり付けるための金具ですが、右と左でベルトに付ける留め方がちょっと違うんじゃないかなと。これが時期を示すものなのか、最初からこうだったのか、もう少し今後の検討が必要になるのではないかと考えております。これをもう少し展開した図で見ると(図6)、これが上から見たこの部分、それと下から見た別の部分になりますので、この正面から見て右側の部分は、あとから後ろの方から打ち込んでいる鉾があるのに対して、左側の部分というのは、元々から飛び出ている鉾がそのまま残っているということです。それとは別に、表金具の真ん中下の方には、また別の、鉾を打ち込む穴だけが存在して、最大5ヶ所で留めていたことになろうかと思えます。

この帯金具は全国に3例目ということで、他の2例の写真(図7)と実測図になります。この鳥羽遺跡(群馬県)と畝田ナベタ遺跡(石川県)のものは同じ文様ではなかろうかと言われてます。ただ、同じ花文帯金具と言っても、穴太遺跡のものとは大きさが全然違いますので、文様形態などは比較できるんですが、これだけ大きさが違っていると、製作や使用の状況などは異なっていることはあろうかと思っております。

5 穴太遺跡の帯金具と龍潭洞遺跡の帯金具

今回の穴太遺跡で出土した帯金具というのは、実は韓国済州島の龍潭洞遺跡から出た帯金具と全く同じ文様のものです。この写真が韓国龍潭洞遺跡から出土したものになります(図8)。実は今年の9月に、

実際にこの韓国の龍潭洞遺跡の資料を見に行きまして、その時は穴太遺跡の帯金具の実物を韓国に持って行くことができなかったもので、直接比較検討するというのが難しかったんですが、あとで画像を重ねてみますと、ほぼ一致する。写真の撮り方などが多少違っていることがあったりしますので、本当に一致するかと言われると、もう少し詳細に検討すべきかと考えますけれども、ほぼ画像としては一致をしています。その中で唯一相違点があるとすれば、魚々子の部分だけがちょっと違うんじゃないかなと思っています。魚々子と言われる部分が、韓国の資料ではちょっと丸が大きいのに対して、穴太遺跡で出た資料では丸の直径が小さいので、帯金具は同じような型から作っていますけれども、最後の魚々子を持つ細かい仕上げの段階では、打っている工具が違うようです。これを時期差ととるか、違う場所で作っているととるかは難しい問題だと思いますが、2つの帯金具は細かい部分まで見て全く一緒だということわけではない可能性があります。

韓国龍潭洞遺跡がどの辺にあるかという話なんです。済州島の北側の中央部分、海沿いの部分です。私が調査に行った時のタクシーの運転手さんのお話では、たしか30年くらい前まではこの辺まで海だったみたいなお話だったと思うので、当時は本当に海にせり出したような所に、龍潭洞遺跡というのがあったんだろうと言われてます。そして済州島のこの龍潭洞遺跡が祭祀遺跡、海洋国家の祭祀遺跡のような扱いになっているそうで、いわゆる交易拠点のようなイメージなのかなと思います。そういった意味では、穴太遺跡は滋賀県なので海がないので、全然違った状況の場所から同じような物が出ているということです。

ここで、穴太遺跡の帯金具を3Dで撮っている画像がありますので、その画像をお見せしようと思います。これが、皆さまも実物をご覧になられたと思いますが、穴太遺跡から出た帯金具になります。先ほどの魚々子の状況などは、アップをしますとこう

いった状態です。本当は韓国の濟州島のものもこう
いったデータをとれば一番いいんですけども、
まだそれがとれてませんので、将来的に研究段階に
は、こういったデータをとって比較することが必要
になるのではないかと考えております。今回これは
三次元データですので、ものを動かして見ることが
できます。今回詳しくはお話しませんが、日本
の帯金具とは形態的に少し違うんだろうと考
えている部分があります。たとえば縁の部分
が少し山形になっていて、文様の部分
がそこから盛り出している、ちょっと縁
の部分がかくつとなるような部分
ですとか、真ん中にあいている垂孔
と呼ばれる穴の縁も少しかくつとな
ってたりする部分などは、私の見て
いる限りでは日本の帯金具ではな
いかならうかと思っておりますので、
やはりそういった形の違いなどはあ
るんだろうと思っております。

今回展示の状態ですと裏面が見え
ませんので、裏面の状況を簡単にご
説明しますと、裏面の斜線は新しい
傷かなと思うんですけども、もう少
しアップして見ると、横方向の筋
のようなものが見えます。もしか
したらこれは、裏金具を作ったあ
とで平滑にするために磨いた痕跡
かなと思っておりますが、ちょっと
細かい所まではまだ検討ができて
いないというところなんです。

6 渤海使と穴多（穴太）駅

ではなぜ穴太遺跡で出たものと同じ
ようなものが濟州島でも出るのか
という話です。このあともっと詳
しいお話が専門の先生方からあり
ますが、可能性としては中国東北
部の渤海もしくは契丹が製作元
で、そこからもたらされた可能性
があると。日本にもたらされたの
は、おそらく渤海使が日本に何度
か来ているので、渤海使経由で来
ているのではなからうかというこ
とが考えられます。先ほど穴太遺
跡の流路が土器の年代から、だ
いたい 870 年から 900 年くら
いかなあというお話、10 世紀ま
でいくかもしませんが、そういった
年代という話をしましたが、

その頃に渤海使が実際にどれだけ
来ているかというのをざっと見て
みますと、結構北陸―若狭です
とか加賀の方に来航している記
録が見て取れます。しかもその
中で、平安京に入っている、入京
しているものを挙げると、貞観
14 年（873）、元慶 7 年（883）、
延喜 20 年（920）の 3 例が考
えられます。

文献でも延喜 20 年に「穴多（穴太）」
「渤海」という言葉が出てくる
史料がありますが、この中で「
穴多（穴太）駅」という言葉が
出てきます。『延喜式』という
平安時代の記録によりますと、
古代官道の中の北陸道と言いま
して、京都から北陸を結ぶ道
の中に、穴太の駅（うまや）と
いわれる馬を乗り継ぐための
サービスエリアのような場所が
設置されていることがわかり
ますが、これまでわれわれが発
掘調査をしてきた中では、ま
だその穴多（穴太）駅の正確な
位置がわかってはいません。た
だ概ね、穴太という今残ってい
る地名から察するに、穴太遺
跡周辺にはあるだろうと言わ
れています。その次が和邇駅
になって、三尾駅、若狭から越
前の方に抜けてゆくというル
ートが、古代の北陸道と言わ
れています。穴多（穴太）を通
らずに和邇駅に抜けるルート
もあるとは言われていますが、
それを除けば、通常は平安京
の次、北陸の方から来ると平
安京に入ろうとする直前にあ
るのが穴多（穴太）駅だとい
うことになります。

今回の調査地というのをまた
地図で見ると（図 2）、この黒
い部分が今回の調査地になり
ますが、古代の北陸道という
のがこの点線を通っていたん
じゃないかと推定されています。
この道は中世とか近世江戸時
代の絵図などにも載っている
道になりますので、古くから
ずっとある道だと考えられて
いる道でして、元々は北陸道
だったんじゃないかと言われ
ています。そこからすると、
極めて近い位置に今回の調
査地というのがあります。ま
た、今回検出した流路とい
うものは、真っ直ぐ流路が
南北方向に走っていたこと
から、今道になっている所
にこの流路が伸びて来ている
んじゃないかと考えておりま

す。一番最初に、「このあたりいっぱい掘っていますが、今回検出した流路の残りの部分が見つからない」という話をさせていただきましたが、それがなぜかと申しますと、元々道の所にある部分、簡単にいえば流路だった部分が道になったから、この周囲を掘っても流路の痕跡が出ないということなのかなと、今のところは考えております。この辺の本当にキワを掘っているんですが、こっち方向に走る流路というのは実は見つかっていませんので、おそらくそういうことでいいんじゃないかと今は考えております

私が調査した時も、実はこの部分というのは当時でもまだ水路が入っていました。ずっと水が流れていましたので、おそらくこういった流路の痕というのが、道になったり、そのまま水路になったりして現代まで残っているんだろうというように考えています。この流路が北陸道と並行関係に走っているというのも一つ面白いなあというのと、北陸道と流路とが110m前後の距離間にありますので、その辺もかなり意図的なものなのではないかなと考えております。

調査地周辺の昭和30年代の地図を見ますと、先ほどから少し話をしている古代北陸道、推定北陸道と言われている道が、カクッと西に曲がって、また南に伸びるというのが推定の古代北陸道になりますが、南下する北陸道の西側が今回検出した流路の推定位置になります。その下の方の延長上に、きれいな四角がいくつか航空写真で確認できます。いわゆる条里とよばれるものでよかろうと考えていますが、それぞれ、推定北陸道の道から条里痕跡までが108mとか110mぐらい、推定流路からも同じ幅で110m前後、縦も110m前後できれいな正方形で条里が見て取れます。なので、今回の流路と言われるものは、おそらくこの条里の縦の区画になるようなものになるのではなかろうかと思っています。ではこの条里というのが何なのかということに関しましては、まだわからない部分が多いんですけれども、

今回の出土事例から見てみると、やはりお祭りなんかをやっている流路ということになりますので、何かしらの施設があったんだろうとは思っています。ただ、この区画された空間がイコール穴多(穴太)駅というわけではありませんので、まだ穴多(穴太)駅というのは発見できていないという状態のままです。今後穴多(穴太)駅の発見には、建物とか瓦、瓦葺きの建物があったかどうかというのは微妙なところがありますが、駅家と認定できるような建物があるかどうかにかかっているのではないだろうかと思っています。ですので、現時点ではかなり情報が少ないです。何度も申し上げていますが、掘っている場所がすごく狭いので、正直に言ってわからないことの方が多いといった状態です。

ただ、穴太遺跡の中で遺構の分布の変遷がどうなっているかということ、大まかにですが今回集めたところ、その中で奈良時代の遺構が確認される部分というのは、点々と見つかったような状態です。それが平安時代になると、この条里のある周辺にギュッと集約されてゆく。白鳳時代から平安時代くらいまで続いたのではないと言われていた国指定史跡の穴太廃寺を除くと、この条里周辺にギュッと平安時代の遺構が集中してくるという状況から、平安時代における穴太遺跡の中心地は、この条里中心にあったのではなかろうかというように考えております。

なので、今回の帯金具が出土したというのも、穴太遺跡の中で中心地だったからということにはなりません。だからと言って、建物跡が見つからないので、穴多(穴太)駅が確実にここにあるかどうかというのは、いまだ言える状況ではありませんけれども、私は個人的には、このあたりに穴多(穴太)駅があるのではないだろうかというように考えております。

以上をもちまして私の発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

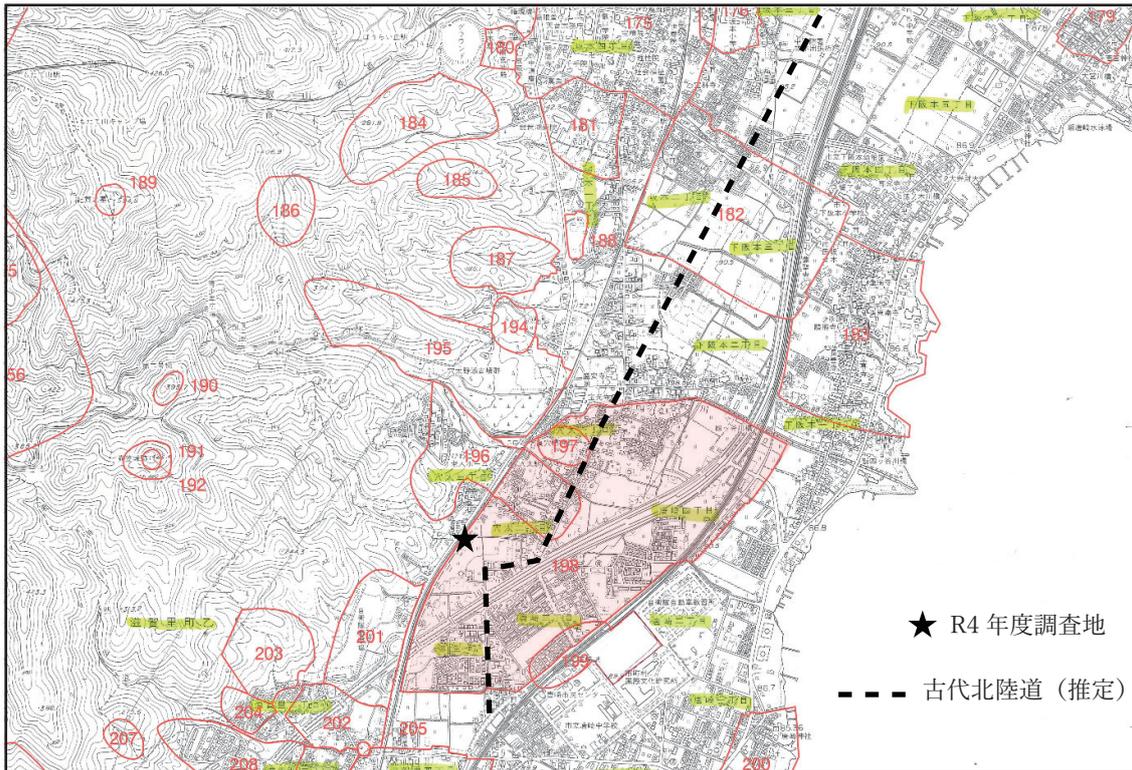


図1 穴太遺跡の位置 (大津市埋蔵文化財調査センター提供)

令和4年度発掘調査の概要

調査期間 令和4年5月～同年6月

調査場所 大津市弥生町

調査面積 約150㎡

調査原因 宅地造成

調査成果 遺跡の主な年代 平安時代(9世紀後半～10世紀代)

主な検出遺構 流路跡

主な出土遺物 金銅製花文帯金具・木簡・灰釉陶器・緑釉陶器
土師器・須恵器・木製品・漆器

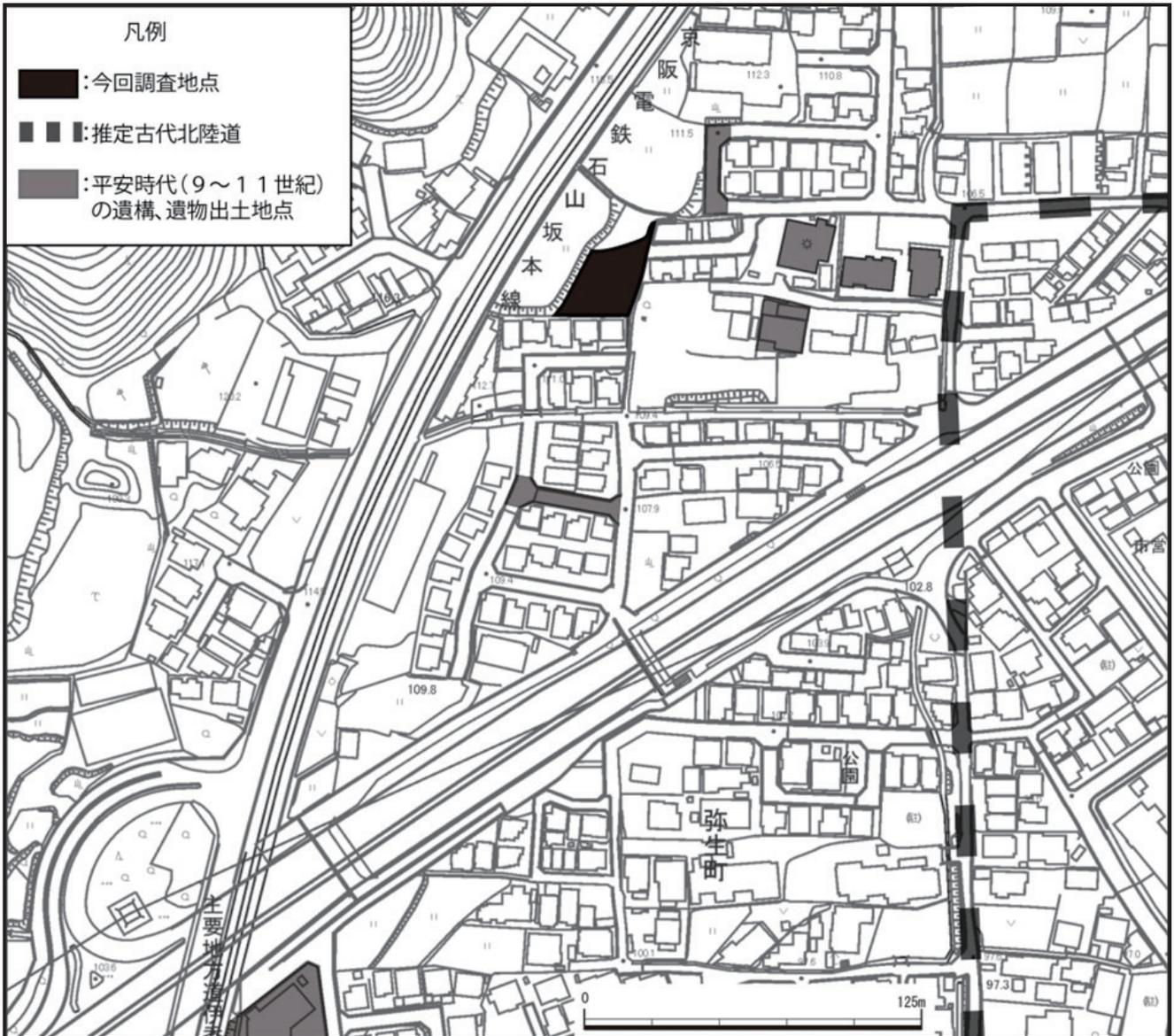


図2 今回調査地と周辺の調査地点(大津市埋蔵文化財調査センター提供)

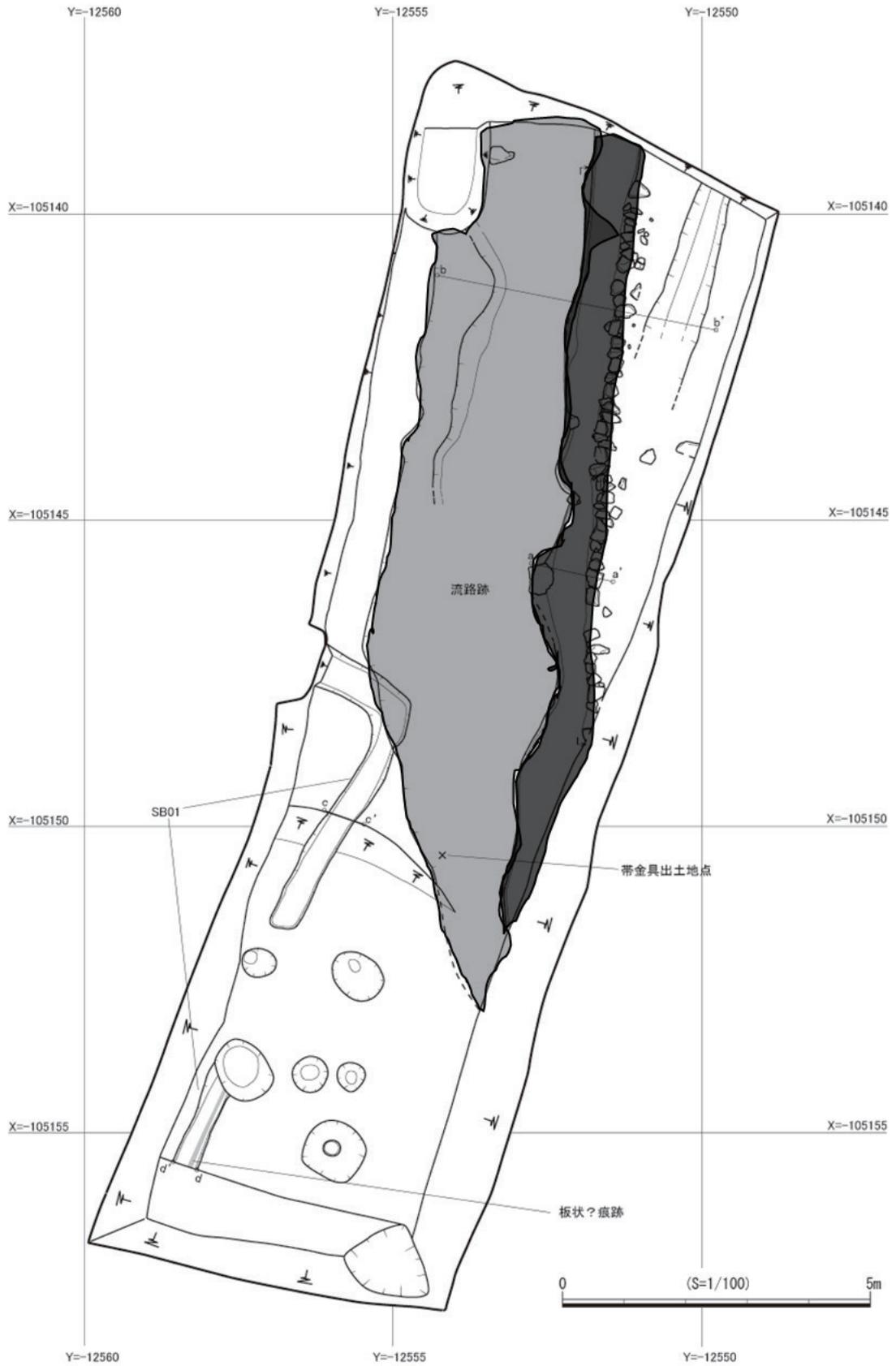


図3 穴太遺跡遺構平面図（大津市埋蔵文化財調査センター提供）



図4 出土木簡赤外線写真（独立行政法人
国立文化財機構奈良文化財研究所撮影・
大津市埋蔵文化財調査センター提供）



図5 穴太遺跡出土金銅製花文帯金具（大津市
埋蔵文化財調査センター蔵・写真提供）

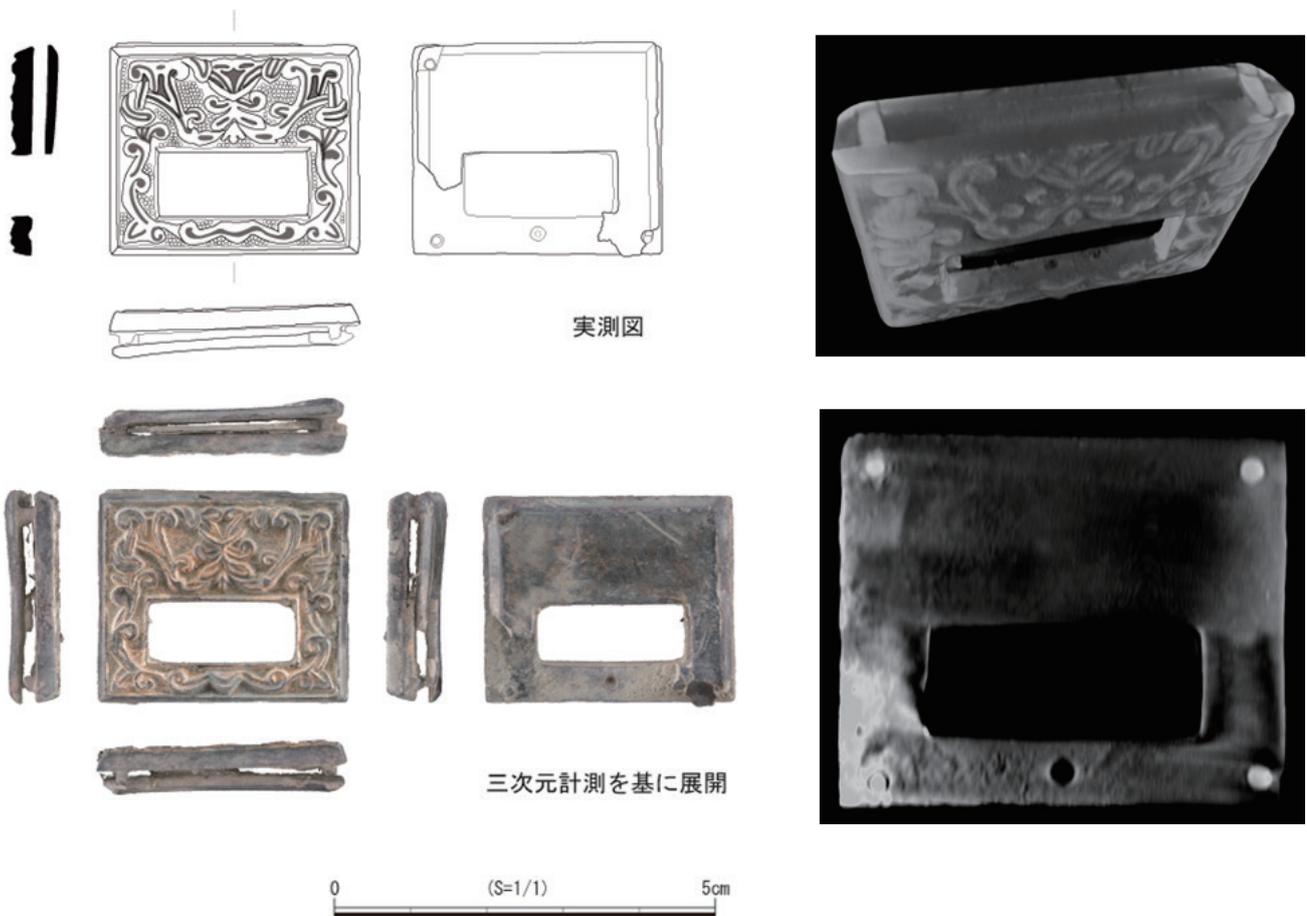


図6 帯金具の展開図（大津市埋蔵文化財調査センター提供、CT 画像は京都国立博物館提供）



図7 鳥羽遺跡の帯金具（左 / 群馬県蔵・小嶋芳孝氏撮影）と
畝田ナベタ遺跡の帯金具（右 / 石川県埋蔵文化財センター蔵・写真提供）



図8 龍潭洞遺跡出土帯金具（国立濟州博物館蔵・小嶋芳孝氏撮影）

横浜ユーラシア文化館
開館20周年記念シンポジウム

東アジアの帯金具と 古代の日本



2023.
11/25 土

受付開始 12:30
13:00~17:40

会場 情文ホール
横浜市中区日本大通 11
横浜情報文化センター6階
定員 200名 参加費 1,000円

延喜廿年三月十日
渤海國大使信部少卿後三位紫雲
石可正

横浜ユーラシア文化館
Yokohama Museum of EurAsian Cultures
<http://www.eurasia-city.yokohama.jp>

※2023年5月29日(月)~2024年夏頃(予定) 休館中



・六本遺跡出土金製帯花等金具
(大津市埋蔵文化財調査センター所蔵)
・『船政艱難』巻20
(国立公文書館デジタルアーカイブより)

開館20周年シンポジウムのチラシ

横浜ユーラシア文化館紀要 第12号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 12

2024年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/
発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷制作 TAKT-JAPAN株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by TAKT-JAPAN, CO., LTD

ISSN 2758-6332